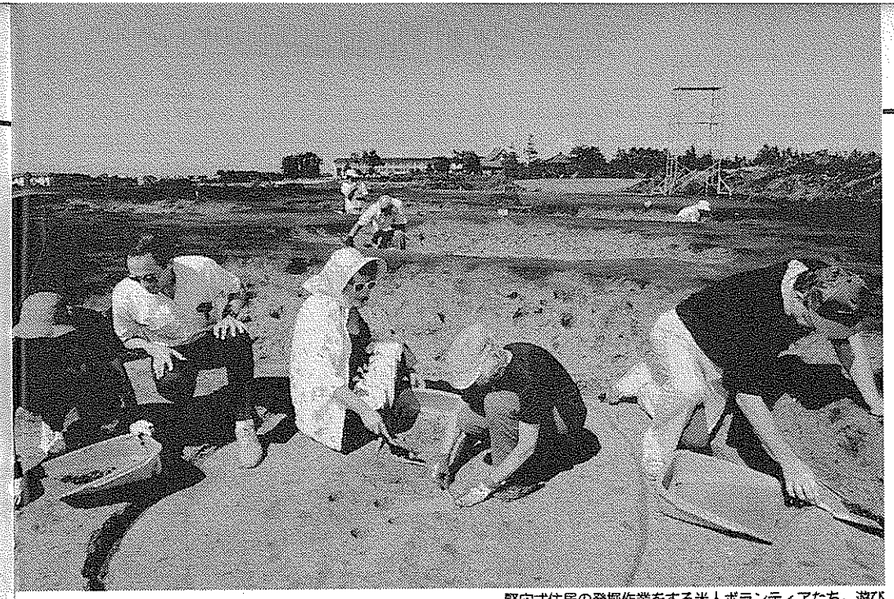
北海道・恵庭のアースウオッチ・ホリデー

ただの観光はつまらない 遺跡発掘楽しむ米人たち

北海道・恵庭の遺跡で、米国人たちが発掘作業に汗を流している。全員手弁当。こんな夏休みの過ごし方もある。



竪穴式住居の発掘作業をする米人ボランティアたち。遊びと思って参加すると挫折してしまう

北海道恵庭市の遺跡発掘現場で、このところ英語が飛び交っている。「アースウオッチ（EW）」のボランティアたちだ。炎天下、シャベルを片手にせっせと土器や石器のかけらを求めて土を削る。

水洗方式の機械を使って土から種子を含む粒子を選り分ける作業をして、記録もとる。朝九時から夕方五時まで、地元のパートタイマーの人たちと一緒に、楽しげにジョークを交わしながら、忍耐力のいる単調な仕事を続ける。

アイヌの祖先といわれる擦文文化人（八～十三世紀）の家屋跡からはアワやヒエの種子が出てきている。アイヌも狩猟だけではなく、農耕をしていたのではないかというテーマを追求するためだ。

帰ったら体験リポートを書く

プエルトリコの火山調査のプロジェクトに参加した経験がある、教師のリニー・ブリスさん(㊛)は、

「どうせ休暇で時間とお金を使うなら、人のためになること、創造性のあることをしたいの」

と参加の理由を語る。故郷のニュージャージーの自然を救おう、という運動をしている仲間四人とやってきた。そのひとり、大学で講師をするケイ・スミスさん(㊛)は、

「常々面白い形のバケーションだと思っていました。専門家ではありませんが、普段から自然科学と環境問題に大変興味を持っていましたので。私のようにズブの素人が調査に参加できるというだけでも素晴らしいことです。現場で専門家の解説が聞けるから知識が増えますし、それをその場で体験できるのもいいですね」

と慣れない姿勢で疲れる発掘作業にも、喜々として挑戦していた。

ボストンの女性教師、マジョリー・ユーリさんは、

「息子が今年の夏はどこに行くの？って聞くのよ」

というほど旅行好き。

「恵庭市という観光地ではないところで、温かい家族ムードの和風旅館に泊まったり、地元の人と一緒に働いたり、アイヌ村を訪れて少数民族の問題について話し合ったり、普通の旅ではできない人との交流体験ができて、来た甲斐があったわ。帰ったら生徒のために体験リポートを書きます。この体験は私の教師としての質も、生徒の学習効果も上げることになると思います」

40年ぶりの日本に感無量

また、テキサスから来たカール・ジョンソンさん(㊚)は、石油会社の元スーパーバイザー。三十九年前に米軍で北海道に駐屯したことがある。俳優のジョン・ウェインばりの大男だが、ネットに付いたサンプルを洗う細かい作業も、ダイナミックにテキサス・ジョークを飛ばしながら、こまめにこなしていた。

元米軍基地、現在は真駒内の自衛隊基地に、以前住んでいた建物が今もそのまま保存されているのを見たときは感無量の様子だった。

恵庭でのプロジェクトは「日本の古代農業」と題するもので、昨年に続き二回目である。カナダのトロント大学助教授で人類学を研究するクロフォードさんがリーダーになり、日本側の受け入れは、クロフォードさんが十六年間師事している、北海道大学文学部助教授の吉崎昌一さんだ。

今回来日したのは研究スタッフ三人、ボランティアは七月十六～二十七日のチームIが九人で、七月三十日～八月十日のチームIIでは六人。滞在期間十一日、実働日数八日のワーキング・ホリデー、海外での労働休暇、というわけだ。

11日間の滞在費用は二千ドル

探究心、冒険心と体力のあふれる人にとっては、環境保護に協力しながら、一風変わった体験ができる一石二鳥のバケーションである。

アメリカでは、EWの入会金、プロジェクト参加費、現地までの往復交通費までが、基金への寄付とみなされ、すべて税控除の対象になる。

普通の海外旅行よりは格安になる場合もある。とはいえ、結構おカネがかかる。EWへの入会金が二十五ドル。現地での交通費、宿泊費、食費にスタッフの経費の負担分などを含め一人当たり二千ドル弱の参加費用。

このほか、日本―米国の往復航空運賃が必要だ。だから、退職したり子供が独立したという、比較的金銭的時間的に余裕がある五十代以上が大半を占める。

このプログラムを主催するEWは、絶滅の危機に瀕する動植物を保護し、人類の足跡を物語る遺産を探究するなどの運動を援助することを使命とする、一般市民と研究者の組織である。マサチューセッツ州に本拠を置き、一九七一年創設以来、資金と人手の足りない研究者の支援を続けている。

今では世界中で百カ所以上の現場に、毎年三千人以上のボランティアを派遣している。研究調査プログラムはブラジルの熱帯雨林調査、アラスカのジャコウウシの生態調査、チュニジアのカルタゴのローマ文化盛衰探査などバラエティーに富んでいる。

実施が決まったプロジェクトはEWの会報に掲載され、会員は百以上あるプロジェクトの中から、参加したいものを選んで、申し込む。特に専門的な技術は必要ないが、適性によって選択された人でチームが組まれ、各地に派遣されることになる。

暑さでダウンした教師もいる

資金は個人の寄付金が大半だが、企業や個人の篤志家の寄付も一割以上を占める。個人は入会金を支払って会員になり、ボランティアとして研究調査事業に参加する権利が得られる。寄付金を送るだけの会員も多い。

このように、普通の人がプロジェクトに参加、協力できるのが特色だ。だが遊び気分で行ってはいけない。カリフォルニアから来た学校教師、ジョイス・ハーウィッツさんのように二日目から暑さでダウンして、後は近所でショッピング三昧という人もいた。

「やはりレイバー的仕事の過酷さを事前に理解せず、知的ムードのロマンに対する憧れだけで参加して、挫折する人が必ずいます」

研究スタッフの一人で、トロント大学院生のキャサリン・ダンドレアさん(㊛)はこう打ちあげる。

フリーライター　明比淑子
写真　高井正彦

イヨマンテ（熊まつり）の説明をアイヌ文化資料館で聞くアースウオッチの参加者たち

北大の吉崎助教授（左端）を囲んでアイヌ文化について語り合うボランティアたち

水洗いしたあと、天日乾燥したサンプル。この中から骨や種子を見つける

サンプルのデータをノートに記載していく。作業場は日よけとハエよけ付き

サイマル出版会
サイマルの本は情報洪水時代の羅針盤

韓国資料から初めて明かされた明治維新史の実相―
《明治六年の権力闘争》
征韓論政変
元駐日韓国公使 姜範錫 著
明治国家政体確立への闘争を検証したユニークな労作。¥四一〇〇

崩れゆく日本文化
いま、古都が問う
清水寺名誉管長 松本大圓 編 ¥一五〇〇
◉京都ゆかりの有識者たちが、《伝統文化》の危機を語り合う。
矢野暢／井上裕雄／会田雄次／千宗室／井上靖／平山郁夫／オーテス・ケーリ

玩物喪志
豊かさに酔う〈慢心日本〉を痛烈批判
がんぷつそうし 井尻千男 ¥一七〇〇

日本の外交
受け身の外交から積極外交へ その主体的条件は―
武田龍夫 ¥一六〇〇

セントラル・パークの鳥と人間たち
大都市のオアシス物語
D・ノウラー著 岩瀬孝雄訳 ¥一五〇〇

アメリカ人のライフスタイル
《ファミリーとソサエティ》
The American Lifestyle
日本人の疑問に米国人が内側から答える
L・ナビッツ著 池田扶実子 ¥四〇〇

ニーワン
セネガルのこころ
ニューヨーカー憩いの場の四季
「チェド」に続くセンベーヌの最新作
人類は平和な時にのみ偉大です（ボンボ）
山本玲子・真弥子訳 ¥一六〇〇

胃袋戦争
ストマック・ウォーズ
食糧問題研究所所長 井上貴司 ¥一六〇〇
食品企業の凄まじい競争の実態と活路

海外家庭教育
海外赴任家族の子どもの教育体験記
樋口健夫・容視子 ¥一六〇〇

ウィーンの日本
パンツァー／クレイサ ¥一七〇〇
こんなに残る《日本文化》の軌跡

異文化時代の国語と国文学
明星大教授 井上英明
《比較日本文化学の試み》 ¥三〇〇〇

＊定価は税込みです。
東京都港区赤坂1-8-10 ☎(03)582-4271